

放下僧

昭和改訂版
外九

特261

56

8

288

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



放下僧

(梗概) 下野國の住人牧野左衛門といふ者、相模國の住人利根の信俊といふ者と口論の末討ち果されーが、左衛門の一子小次郎日頃無念な思ひ、邊り近き寺に入りて僧となれる兄を訪ね、復讐の事を談合ー、兄弟の逡巡するを勵まして、遂に兄弟意を決ー、その頃流行せし放下僧に扮して敵を狙ふ、爰に信俊はも續き夢見悪ーく武藏國瀬戸の三島明神に参詣せんと旅立ちーが、旅中の徒然を慰めんと、彼の兄弟の放下僧を呼び、禪家の問答など始めてーに、兄弟はそれと敵の信俊なることを覺り、放下のならひとーての羯鼓をうち、小唄をうたひ舞ひなどする隙に來ト、首尾よく信俊を討ちて其本望をとげー現在物の一曲なり。

シテ 小次郎の兄
ツレ 牧野小次郎
後シテ 前同
後ツレ 同
ワキ 利根信俊
所 武藏國瀬戸
季 不定

故下條

是も下條は北條人、^{相模}の左衛門
佐永子に、小波郎と申す者にて、^相も
親として、^相も相模國の住人、利根の住
人、^子我おが親乃、故北事、近
國よおみて、其のうれなく、^也ども彼を

猛勢モウセイ家カミおもは兄弟兄弟あアでハあくい
祖シロよシロ思マコトひあくいアドみとよモトヨり者ヒト
えん強切アキラカり近アタマ幸ラッキふ渡ワタリり祖シロよシロ
城シテう根ルネの事モノをモも读リ合スルせマやト存リ
いシふば肉シバナ、素肉ソウナやハ小コシ部ブ、年タメりてリ
てテ小波郎コボラン波ハばすハ渡ワタリりハ、撫ハラフるハ

きの乃ノあれアレはおにくハシそツキさんハ峰
くある事モノよハの後アフタよハ船ボート、あくアクが帆ハタケ
の敵アシキとハ國カントよハたしてハ其ハにハまハあくい
るアシキふすハて討ハシムよハとハなハ説ハナダかハ北ハタケ
よハありアリ、
事ハシムよハ障ハシムなハゆハをハ彼ハ猛勢モウセイ、我ハシム

左壁見事あるてがなくひ程よ、里あり
うひみくひ時^{口上}時^下を西行へ つま
の敵をうぬ考^{キヤウ}不考^{キヤウ}考^{キヤウ}事
比^シ親の敵を討^{キヤウ}ぬ考^{キヤウ}不考^{キヤウ}考^{キヤウ}と
めうに事も、眞惠^{シヤウ}御^{シヤウ}性^{シヤウ}の人乃^{キヤウ}
あふ^フたる北行^{ハキ}に^フいや親の敵

を討^{キヤウ}て考^{キヤウ}よせあひたるいそれのひ
坐^{シテ}謂も^シ 座玉^{シタマ}のすにや^ハめを^シ虎^シ
にと^モれ、其敵を討^{キヤウ}んと、百日事^{モカ}伏^ス
野^ノより出^シて狼^{シカ}を^{シカ}殺^ス事^{アリ}に、
尾^ヒ上のねを^{シカ}あぐ^スれふ^{シカ}どらよ似^スる大^ス
石^{シカ}のみ^{シカ}を^{シカ}敵^{シカ}虎^{シカ}と^{シカ}得^スつぐるを^{シカ}

れども内むりくおう、其の外に、巣鴨乃
たち、血流きたるとて、風及そりへ
只おぼへて、口きりへ 一と
お引く、承る程よ、あはひさくわまま
みるゆきあがく、いやうにて、彼者よは
を付ゆべき つま、ち程人せまで、あそびゆ、

放下取て、なんゆい、あつたれ放下には
成あきうーと、ぬゆ 一言是がよてゆ、
はあば放下には、あふきふみゆ
上弓きく一ゆく、ゆく思ひ立んと、ゆぢりの弓
よ整けば、我も妹しく、ゆひつ、放下せ
婆に身をやかして、さもすくと

二二二二二、日上^{アシタリ}たち出る^{アガル}、^{アガル}の名あもはぞれ者
の^{アガル}づきぬになぐらあぐらかる、
翁そ^{アシマハ}りほくはまをあゆ、おもん^{アシマハ}
わき^{アシマハ}中入^{アシマハ}あり、我^{アシマハ}まふ神^{アシマハ}御^{アシマハ}、
御^{アシマハ}ぬまむまん^{アシマハ}是^{アシマハ}、お挂^{アシマハ}の園北住
人^{アシマハ}利根^{アシマハ}仕候^{アシマハ}て、我^{アシマハ}お施^{アシマハ}、^{アシマハ}まえ意^{アシマハ}

二二二二二、^{セイ}サシ^{アシマハ}い程^{アシマハ}よ、^{セイ}サシ^{アシマハ}窓戸^{アシマハ}北^{アシマハ}島^{アシマハ}へ^{アシマハ}系^{アシマハ}詣^{アシマハ}、仕^{アシマハ}レシカく
而^{アシマハ}白^{アシマハ}比^{アシマハ}家^{アシマハ}も^{アシマハ}うを^{アシマハ}挂^{アシマハ}や取^{アシマハ}僅^{アシマハ}候^{アシマハ}二^{アシマハ}の^{アシマハ}石^{アシマハ}を
置^{アシマハ}きて、^{アシマハ}お^{アシマハ}詞^{アシマハ}も^{アシマハ}弱^{アシマハ}き^{アシマハ}あ^{アシマハ}、^{アシマハ}せ^{アシマハ}振^{アシマハ}
序^{アシマハ}を^{アシマハ}降^{アシマハ}家^{アシマハ}と^{アシマハ}、^{アシマハ}と^{アシマハ}ひ持^{アシマハ}き^{アシマハ}、^{アシマハ}あ^{アシマハ}き^{アシマハ}方^{アシマハ}城^{アシマハ}、^{アシマハ}一^{アシマハ}
あ^{アシマハ}そ^{アシマハ}あ^{アシマハ}ど^{アシマハ}か^{アシマハ}、^{アシマハ}ま^{アシマハ}わらん^{アシマハ}、^{アシマハ}二^{アシマハ}人^{アシマハ}前^{アシマハ}を^{アシマハ}
紫^{アシマハ}比^{アシマハ}毒^{アシマハ}を^{アシマハ}あ^{アシマハ}す、^{アシマハ}白^{アシマハ}雪^{アシマハ}あ^{アシマハ}よ^{アシマハ}お^{アシマハ}ふ

とまつつきよひか
との流水さんせうの秋よりて
ま
せまやあそふともとうやチ
水のゆし夕
せぬ
さくらみあまを乃るそとタ
あれおもづきのさめあまきゆよあら川の
水せうとくと家いりに人を呼ぶあらが
えんざい

流

シカく わき

凡の門の形といけ

おの心原二三浦の夜をまし花はま城
悔れかなひをうけたゞ力の疎數を
みぬとひて我傍とひへられ早形乃
生立心清難くい先ん柱杖よ圓をほそ
持手すう、圓の一句承度ひ してま圓
とやか勲く時もほ風を吹す我が威

時も、今月を重んじ、明月清風只同は。
諸法をひが、衍化とて、のれゆきりば
種あれば、かくおほそに理なり。咎めぬふ
ぞ、ああああ。圓乃一句、面白うひふと
一人、もうちやめを尋ね、ひふ是もお怪の
道具があう。まうとやへ、をまよひ

先の形、ちを取る。淨縁不二の純法
を表す。ほきも、まよは、潔明も、神也
せらみ、智も、乃キをも、四天のま
を破りたまふ。ほきを我わも、是を指す。
て、もくぬう、放さぬをも、そむく
時も、あくびも、もづきも、まきと、

あくによもやもみあらへあわのれ
宣ひそく シカく 拉く囁ぬへまく
り放ら候とふにき北祖師、前仙
何と清清へゆそ。宗神が、あたうひ
あらう宗神とやハ教外ぶ傳ふて
いふもされす、説もどもきび、言ちよ出

せんにあち、文字もたつれば宗
神も背く。上二三二二ト一、下二二
絶角もば覽せよ。奥座祖北あり
あんのとせ得ゆべき 入ぐはいゝあんの
底までうし。出くも二味の門よあそふ
ま、自分自佛、おいたして白雲深き

ゆる根乃山のいもほりをゆめ歩くあま
三宿おわづかのまうちあ上しききが大ふの
根株をきくと指或破或シカクえんと
日み寄れ二角んよ首ふ事なべし
物ひかるされを手本も皆はれれぬ
を旅す。柳の緑色が紅ある甘きを

旅のそとをうきり キセイ まつ陽のまわせゆは、ちぢ
えあるるよし。こほきる優しくうめて雪消
れ水のうたうあまふぬひを、どりする桂比
ひ急きけば心の何よりのを、想よすぬ秋残
風よそそく秋比葉あそぶが、なみの、カタシマ
たつる種なまきて鶴繁のまわせ夕時雨あ

、
こひうぬるかせ葉の角、すす月をひよる
て指を忘るもとひあり 上 ゆうひは深の鉤
あハ魚を得て竿をまつ、色をうん彼ヤク
をきく時、山の嵐やおれあ、ゆあべる、
烟りぬくにさばる、二界峰をめことなりあ
まざれやうへん、を浅悟りたるへや

上風よ住するほゆの經と心や成ぬん
トテ稻^{シナ}上^{カツ}面白の花乃がくや草もよすむ^{タマニハ}アド^{アド}東
トリ^{トリ}みは孤園^{ソノガク}は水藻^{ミズモ}ある園の^{スル}有羽^{アヒ}花亂
に^{スル}也主比^{シナヒ}梅^{メイ}ハちり^ハアハ法^ハ海^{シマ}崎^{シマ}の
清^{シラカバ}も^{アハ}は浦^{ハシ}されみ車^{ハシ}北^{ヒタチ}軒^{カヌ}の舟^{フネ}
く北川^{ヒタチガワ}は阿^{アハ}梅^{メイ}を水^{ミズ}よりアハ^{アハ}

雀^{サザンカ}竹^{スダチ}よもまる^{モモマツ}の鳥^{スズメ}ハ風^{カキツバタ}ふわは
一^{シテ}、三^{ミツ}シナ^{シナ}牛^{ウシ}ハ車^カに^{シテ}あらう^{アラム}、紫^{シシマツ}御^{ミコト}も^{アハ}
捨^{スル}木^{モミ}よもまる^{モモマツ}、實^{ミツ}誣^{ハシ}、され^{アハ}も^{アハ}りとよ^{アハ}
あさりこ^{アハ}は放^{ハシ}下^{アハ}に^{シテ}ゆきまる^{ヨシマツ}、こわり^{アハ}りあの^{アハ}
弓^{クニヤ}の竹^{スダチ}乃^{ハシ}代^{スル}を^{シテ}まね^{スル}、お^{ハシ}りた
道^{シテ}代^{スル}お^{ハシ}、^{シテ}前^{ハシ}を^{シテ}かくみ^{スル}べき^{アハ}。

序

上

引上
たとくいせふぬまつまく
此年月
報のまゝかうこそとほまく影ひの便よ
敵をそ討すりける。かくて兄弟家
力せぐ
其勢のあまく匂地よ貌の
敵をうめりもあれりゆまゆえみよま
久もあま代よとくめゆり

有所權作著



昭和九年三月廿五日印刷
昭和九年三月三十日發行

定價金五拾錢

著作者 實生

新

東京市下谷區上根岸町八十二番地
東京市京橋區銀座西六丁目三番地

監修兼印刷者

江島 伊兵衛

發行所 下掛寶生流謡本刊行會

終